玉谷　直美著『女性の自己実現――こころの成熟を求めて』

（女子パウロ会）

中村　弓子

著者はキリスト者であると同時にユング派の心理療法家であり、その二つの立場を不可分のタテ糸とヨコ糸として、女性の自己実現の問題を考えたのが本書である。

ユングに倣って著者は、心の意識されている部分の中心を「自我」と呼び、無意識的な部分までを含めての心の全体の中心を「自己」と呼ぶ。そして、自我のしがらみを外しながら、自己との対話を続けてゆくことによって心の全体性が開発され、自由で成熟した人間性が獲得される、それを自己実現と呼んでいる。

実人生において、そのような自己実現は、古い自我が自己の本性に否定されて新たな自我に生まれ変わる「死と再生の論理」として体験されるものであり、また、みずからにおいて死ぬことにより他者との新たな愛を得る「愛情の論理」として体験されるものでもある。

本書の冒頭にはそのような体験の、単純ながら含

蓄の深い具体例が示されている。
　ある幼稚園児が給食の牛乳をどうしても飲まないので、業を煮やした先生は母親を呼び出して、この子はわがままに育てられすぎているから、お母さんが努力するようにと衆目の前で説教をした。教師である母親は恥ずかしさと悔しさでいっぱいになって家に帰ると、牛乳を飲む練習をさせ始めた。毎日同じ努力を続けたが男の子はがんとして口を開かない。そうしたある日、母親はこの子が二歳のころのある出来事を思い出した。家はお手伝いさんに任せていたが、このお手伝いさんがたまたま牛乳が大嫌いな人だった。しかし母親から言われていたので三時には牛乳を飲ませていた。ところが、ある日この子が牛乳を吐いてしまい、その吐いた牛乳の匂いに、お手伝いさんは子供をはねのけて「よくこんな臭いものを飲んでいられるね！」と言ってしまった。この子はその日からぱったりと牛乳を飲まなくなってしまったのである。この出来事を思い出すうちに母親は、「牛乳が飲めなくなった」という事実の中に、頼れるただ一人のお手伝いさんに拒否された子供の心の痛みと、母親から当然受けなくてはならないお乳のように甘く暖かい愛情が与えられなかったという子供の悲しみに気づくと、不思議なほど子供に対する暖かい感情が溢れてきた。教師としての責任感の強いこの母親は、わが子に対する情に溺れていては仕事ができないと、無意識に自然な愛情を抑圧してきたことを感じて痛悔の涙にくれた。しかし、その後この母と子の関係はがらりと変わった。牛乳を飲む練習をさせる執拗な熱心さはなくなり、子供に対して自然で暖かい接し方ができるようになった。この母親は愛情を抑圧してきた自分の心の固さに気づいたとき、以前の自分を否定したのである。そして新たに生まれ変わった目でわが子を見たとき、わが子もまた生まれ変わっていたのである。

　だから真に生きるためには生がつねに死を含んで

いることが必要であり、女性の一生の転換期には必ずこのような「死と再生」が伴う。本書の第二章「処女である花」、第三章「実りある母」には、娘から結婚を経て母親に至る女性の一生の決定的な局面における「死と再生」のありようとあらねばならぬ姿が、筆者の心理療法の実例と神話や物語を通じて考察されてゆく。

女性の一生の流れは結局、娘時代の自己愛から、この自己愛に死ぬことによって真に実りを結ぶ母性への再生の流れであると言える。母親は子供をいつくしみ育て、いやし、憩いを与えることによって、子供と世界をつなぐ環となる。地母神信仰に見られるように、母性とは文字通り肉体的にも「死と復活の器」として、女性の自己実現の成就の姿ともいえる。しかしまた、母性は自分の欲望のとりことなって子供を食い殺す否定的な特性をも持っている。自我に死ぬことのない母性は他を死なせてしまう。だから母性が成就するためには自我のはからいに死

ぬ、謙虚な母の悲しみが必要なのである。

女性の一生を通じてのこのような自己実現の体験は、すべてを受容する器としての「からだ」を基盤とすると同時に、「からだ」が受容した直接体験を「言葉」が意識化することを要求する。「からだ」と「言葉」のこの対照は、血と肉の世界と精神の世界の対照でもあり、結局は母性と父性の対照へと連なってゆく。ユングがすべての人間の中にその共存を見る、アニマ（女性的なるもの）とアニムス（男性的なるもの）の対照である。

だから、女性の自己実現は、女性的なるものを男性的なるものとの出会いによって乗り越えることによって最後の成就を果たす。母性はありのままの母性を乗り越えることによって真の個の確立へと連なってゆく。

本書の第三章までは女性の自己実現を母性への流れにおいて把えているのに対して、最終章「個の確立」は、特に現代の女性にとって決定的な意義を持つ「個の確立」のための、女性的なるものの乗り越えの問題を考察している。その際に著者は、ユング派のノイマン女史に倣って、女性が父性を統合してゆく過程の「元型的に共通な道」として、『アモールとプシケ』のギリシャ神話を取り上げ、その神話解釈を通じてこの問題を解明してゆく。しかしこの道はなんと困難な道であることか！ 日常生活の限界の中で、女性がこの神話に象徴的に展開する局面を辿ることは至難の業であろう。各人の生活の中でどのようにこのような理念を生かしたら良いのか？しかし逆に言えば、現実には至難の業であるからこそ、「神話」は存在していなければならない。

この神話によって展開される様々な局面に一貫した姿勢は次のようなものである。すなわち、女性が男性を真に生きようとするなら、つねにみずからの深淵に気づき、傷つき、しかも癒されつつ、徐々に男性の世界に参入してゆくという努力をすること。女性の意識化、個性化は男性と類似の成長を辿りつ

つも、つねに無意識の根底に結びついているような臍帯を保持し続けてゆくこと。その臍帯とは「愛する」能力である。「真に知性的であるためには感情が鍛えられていなければならない」。

著者はすでに第二章において、女性の存在を壺に喩えて、女性にとってのあらゆる体験について次のように言っている。「体験は壺のなかで変容し、あるものは香り高い精神となって発酵し、またあるものは壺の底に沈み土と化してゆく」女性にとっての自己実現とはつねに、「土と化す」ことと「発酵する」こととの良き統合であるといえるだろう。そしてそのようなものとしての女性の自己実現の辿り着く姿を、著者はユングのキリスト教観に倣いつつ、聖母マリアの中に見ている。マリアを内的に生きること。マリアの中には、キリスト教的人間観の本質と結びついた運命的な両義性が象徴されている。神の聖霊による処女懐胎は、男女の肉の結合による懐胎ではないものとして、肉の原理の否定を意味する。しかし同時に、肉から生まれた女性が神の母となることによって肉の原理を肯定している。霊的なるものの肉的なるものによる受容。マリアの中にエヴァは乗り超えられており、マリアを内的に生きるとは、エロス的肉体性をロゴス的精神性に結合させることに他ならない。そのとき女性の魂は天の父を知り得る。著者はマリアの中に、「父なるもの」を内在する女性の生き方の究みを見るのである。

本書を通じての著者の姿勢には一貫して二つの要素が見られる。ひとつは、人間の深い自己というものに対する尊重と信頼。そしてもうひとつは、女性の愛する能力に対する評価。このような姿勢は、私たちが自分の自己実現を生きる為にも考える為にも大きな力を与えるものである。

（お茶の水女子大学）